

1. *Streptococcus uberis* の関与が疑われた鶏の趾瘤症の一例

高知県中央家畜保健衛生所 ○千頭 弓佳

【発生概要】

発生農場は約 26,500 羽を飼養する肉用鶏飼養農場で、平成 27 年 1 月、440 日齢の種鶏群（白色プリマスロック、雌）で死亡羽数が増加した。鳥インフルエンザ簡易検査は陰性であった。その後も死亡が続き、同年 3 月、2 羽（No.1、No.2）の病性鑑定を実施した。

【材料と方法】

細菌検査：2 羽の主要臓器、左右の趾蹠、No.2 の右長腓骨筋について、5% 羊血液寒天培地（CO₂ 培養）、マンニト食塩寒天培地、DHL 寒天培地を用いた分離培養を実施した。また分離菌 8 株について、一濃度ディスク法により、オキシテトラサイクリン、アンピシリン、アモキシシリン、ペニシリン、セファゾリン、エリスロマイシン、エンロフロキサシンに対する感受性試験を実施した。

病理組織検査：常法により作製した切片をヘマトキシリン・エオジン（HE）染色した。

ウイルス検査：気管、腎臓、肺乳剤を用い、鶏伝染性気管支炎（IB）の PCR を実施した。

環境材料からの *S. uberis* 分離および疫学的解析：発症鶏舎の敷料、オガ、堆肥から、*S. uberis* の分離を実施した。さらにパルスフィールドゲル電気泳動（PFGE）による病鶏由来株との遺伝子型解析を動物衛生研究所に依頼した。

【結果】

剖検所見：2 羽とも主要臓器に著変はなかった。しかし、No.1 では、趾蹠や跗蹠部の皮下に、No.2 では、趾蹠や右長腓骨筋内にチーズ様物が貯留していた。

細菌検査：主要臓器から有意菌は分離されなかったが、チーズ様物から、血液寒天培地で純培養的に白色微小コロニーが分離された。分離株はアピストレップにより、*S. uberis* と判定された。さらに、16SrRNA 遺伝子解析により、*S. uberis* と同定した（動物衛生研究所で実施）。また、分離株は 8 株ともすべての薬剤に対して感受性であった。

病理組織検査：No.1 の趾蹠、No.2 の右長腓骨筋で偽好酸球を主体とした炎症細胞の集簇、膿瘍形成が認められた。

ウイルス検査：2 羽ともいずれの検体も IB の PCR は陰性であった。

環境材料からの分離および疫学的解析：発症鶏群の敷料及び隣接群の敷料から計 5 株の *S. uberis* を分離した。PFGE 解析の結果、環境由来株の PFGE パターンは病鶏由来株と比較してバンドの相違が 5～6 本で、これらの株間に疫学的関連性がある可能性が示唆された。

【考察およびまとめ】

今回、鶏の趾瘤症の病変部から *S. uberis* が分離され、本症例には *S. uberis* が関与したと考えられた。さらに、病鶏由来株と敷料由来株との疫学的関連性が示唆され、敷料中の *S. uberis* が感染し、趾瘤症を発症した可能性も示唆された。*S. uberis* による鶏症例の報告はほとんどなく、非常に珍しい事例である